

「秋の野の花」

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首

1) 秋の野に 咲きたる花

および

を 指折り かき数ふ

かぞ

ななくさ

れば 七種の花

作者 山上憶良 卷八一―一五三七

（解説）

秋の野に咲いている花を指を折って数へたならば、七種類の花がある。

はぎ

2) 萩の花 尾花葛花 な

をばなくずばな

でしこの花 をみなへ

ふじばかま

し また藤袴 朝顔の

花

作者 山上憶良 卷八―一五三八

(解説) その七種類の花は、萩の花と尾花・葛の花・ナ
デシコ・オミナエシまた藤袴・朝顔の花である。

① 「萩」はマメ科の低木または草木で、秋に房状の
花をつける。

・萩の名は、古い株から芽をだすところの「生え
芽」というところからきているとの説がある。

・「萩」の草冠に秋の字は秋に花をさかせるところに
よる。

② 「尾花」の現代名は「ススキ」、ススキの穂が出た
状態が動物の尾をおもわすところから「尾花」と
いう。

③ 「葛花」はマメ科で各地の山野にはえる多年草つ
る性の赤紫色で蝶形の花をつけ、下方より咲き登
る。根は肥大し、葛粉をつくり薬用、食用にする。

④ 「なでしこ」は七〜十月にかけて花をさかせる。

花の先が細かく切れ込んでいるのが特徴で淡い赤色が主流。江戸時代以降、清楚な日本女性を「大和なでしこ」といったが、この呼び方は平安時代に漢種が伝来し、「漢ナデシコ」と呼ばれたのに対してこう呼んだという。

⑤ 「をみなへし」は夏から秋にかけてアワ粒によく似た黄色の小花を群がり咲かせる。

・「をみなへし」の名は「をみなめし」から転化したとする説が有力で、「をみな」は女の意味でやさしさを表し「めし」は花の姿がアワ飯めしのアワにそっくりなことからアワを省略したものといわれている。

⑥ 「藤袴（ふじばかま）」は秋の七草のうち、最も香り高い花。葉は三つに裂けていて、ふちに鋸歯をもち一種の芳香がある。秋になると、淡紅紫色の小花が茎にむらがり咲く。香草・香水蘭ともいい、古くは「あららぎ」といった。

⑦ 「朝顔」は、日本に原生せず、奈良朝後期に遣唐使が種子を薬物として持ち帰ったとする説がある。朝顔はムクゲ説やヒルガオ説などがあるが

「キキョウ説」が最も有力とされている。

(参考文献) 大貫 茂著「万葉花の名花」、吉野恵美子著「万葉花のし

おり」、牧野日本植物図鑑」、日本古典文学大系「万葉集」等

(写生地) 万葉集にゆかりの深い奈良・春日野の地に奈良時代に平城京の守護神として建立された春日大社境内に昭和7年に約300種の万葉集で歌われている植物を植栽された我が国で最も古い万葉植物園として開園した「春日大社神苑・万葉植物園」の園内を描く。(池田杏花)

